中国語における“被我”が用いられた受身文の成立について
── 発話者の主観性という観点から ──

路　浩宇

キーワード　*“被我”　受身文　成立　発話者　主観性*

0．はじめに

中国語では第一人称が動作主目的語となる受身文が存在する。例えば、

（1） 突然身边出现了很多野兽,豹子啊狮子啊老虎啊什么的,都被我一一击退。（微博）

[突然身の回りにたくさんの野獣が現れ、豹やライオンや虎など、すべて私によって一頭ずつ撃退された。[1]]

（2） 裤子上面被我弄了一个洞，我很沮丧，但依然会穿它。（姚明《我的世界我的梦》）

[ズボンは私によって穴が一つ開けられてしまった。私はかなりがっかりしたが、相変わらず、そのズボンをはくことがある。]

この二例はいずれも「受動者 N +“被我”+ VP」の構造を有しており、発話者の「自己称揚」（例 1）や「自己批判」（例 2）といった主観的感情が表される。このような受身文は杉村（1998）ではそれぞれ「自己称揚の受身文」と「自己批判の受身文」と呼ばれている。

本稿は“被我”が用いられた受身文がどのような語用的機能を有するのか、プロトタイプの受身文と比較した場合、どのような意味の相違点があるのかなどの問題点を取り上げ、発話者の主観性という観点から杉村（1998）のいう「自己批判」と「自己称揚」といったニュアンスが生じうる動機づけについて考察するものである。

1．“被我”という表現の特殊性

杉村（2016）は言語類型論の視点から、日本語、ベトナム語、インドネシア語などの十種類以上の言語においては第一人称が受身文の動作主となることができないのに対し、中国語では、非典型的なタイプではあるものの成立可能であると論じている。ここで、日本語と対照する例を見てみる。例えば、

（3） a??お金は私に（よって）使われた。
b お金は私が使い切ってしまった。
c 钱被我用光了。 （a、b、c ともに自作）

日本語では、（3a）のような第一人称が動作主となる受身表現は容認度の低いものである。通常、このような意味を表す際には（3b）のような能動の形で表現されることになる。しかし、中国語では、同様の意味を表す受身文（3c）は自然な表現である。（3c）のような表現は久野（1978:169）によって提唱されている「主語になり易さのハイアラーキー」の原則では説明できないものである。「表層構造の視点ハイアラーキー」とは、語られる事態に複数の関与者が参与する場合、一般的には発話者が主語に選ばれる可能性が最も高く、その反面、人間以外のモノが主語に選ばれる可能性は最も低いということである。受身文の主語と目的語の視点の捉え方として、発話者は主語寄りの視点を取ることが最も容易であり、目的語寄りの視点を取ることは最も困難であるということが言える。

上記の研究に加え、木村（2014）は認知的な視点から受身表現の日中対照を行い、第一人称が動作主となる受身文は「傍観者俯瞰型の視点」を有する言語表現であると述べている。以上の諸研究からも、中国語の受身文における「“被我”+VP」という目的語寄りの視点は自然言語の一般的な傾向と考えられている制限に反するものであると言えよう。

本稿では、以上のような第一人称の動作主目的語を持つ受身文について、「自己称揚」と「自己批判」のニュアンスを表す動機付けを検討し、さらに動作主目的語の機能を巡って論を展開していく。

2．「自己称揚」と「自己批判」の定義

杉村（1992）で提示されている「自己称揚の受身文」と「自己批判の受身文」の二つの概念について見ると、「自己称揚の受身文」とは、何らかの難事が発話者本人或いは発話者の感情が移入されたことによって達成されたという事象を

表す受身文である（例 4）。これに対し、不如意な遭遇を表す受身文の動作主が発話者自身である場合、それは発話者が自らの行為によって不愉快・不利益を被ったことを積極的に伝えるものと理解できる。杉村（1992）はこのような受身文を「自己批判の受身文」（例 5）と呼んでいる。

（4） 多少年谁也找不到，可叫我找到了。（杉村 1998）―［自己称揚］
［何年もの間誰も見つけられなかったのに、それが僕によって見つけられたんだよ。］

（5） 本来，我有很多机会可以学些本事，替他分忧，可是，多少时间，被我白白糟蹋过去！（杉村 1998）－［自己批判］
［本来ならば、私には何かを身に付け、彼の負担を軽くするチャンスがたくさんあったのに、どれほどの時間が私によってむざむざと無駄にされたことだろう！］

例（4）では誰も見つけられなかったものを自分が見つけた後、難事の達成を誇る発話者の満足感が表されているのに対し、例（5）からは過ぎてしまったことをあとになって悔やんでも取り返しがつかないという感情の色合いを読み取ることができる。

３．「自己称揚」と「自己批判」の具体例

“被我”が用いられた「自己称揚」と「自己批判」の受身文から読み取れることができる発話者の主観的感情や意図について、具体的な例を挙げて説明する。

（6） 下个月 8 号等着被哥哥[2]我俘虏吧！（微博）―［自己称揚］
［来月の 8 日、俺様に負かされるのを待ってろ！］

（7） 那个家伙被我揍了。（微博）―［自己称揚］
［あいつは私にどつかれた。］

（8） 蛋糕被我一个人吃的还剩这些了，减肥失败！（微博）―［自己批判］
［ケーキは私に食べられちゃって、あとこれくらいしか残っていない、ダイエットは失敗！］

（9） 第一天穿的袜子就被姐姐我穿破，强大啊！（微博）―［自己批判］
［初めてはく靴下はお嬢さんである私によって穴を開けられてしまった、（私って）すごいでしょ！］

まず、「自己称揚」のケースとして、例（6）からは発話者が強い姿勢で対戦相手に絶対に勝てると宣言している傲慢な語気が読み取れる。例（7）は“家伙”

という人をからかう呼び方を用いて「相手」を見下し、自分が相手を殴った行為を正当化するニュアンスが表されている。また、「自己批判」のケースとして、例（8）からは、自分の食欲をコントロールできなかったことで、ダイエットの目標達成が叶わず失望し、どうしようもなくなっている発話者の気持ちが読み取れる。一方、例（9）には発話者が初めてはく靴下を破ってしまった自分の行為に笑うに笑えない微妙な感情が現れている。“强大啊”［すごいでしょ］の裏にはマヌケな私という自嘲のニュアンスをも読み取ることができ、反語表現によって、発話者の感情表現が際立っている。

一般的に中国語の受身表現は、受動者或いは発話者にとって望ましくない意味を表す[3]。刘月华等（2001：754）は受身文の意味的特徴について、ある動作行為に影響され、受動者に変化が生じることであると指摘している。李劲荣（2010:81）も中国語のプロトタイプの受身文は影響を受ける側の視点から使役性の事象を描写し、受動者は動作主に影響され、ある結果性の状態になる過程を表すと述べている。

一方、“被我”が用いられた受身文は、中国語のプロトタイプの受身文の意味的特徴と異なり、受動者の変化が起こる過程を通して、使役性事象の主体である“我”の能動的役割と主観的感情を表すのである。例えば、

（10）注安啊，注安，你逃有什么用啊，还不是被大爷我给逮住了。（微博）
—［自己称揚］
［注安よ、注安、お前は逃げて何のたしになるのだ？結局俺様につかまっただろ？］

例（10）では注安が動作主にどのように捕まったのかを説明するのではなく、注安を捕まえた“大爷我”（発話者本人）の自慢と威張る気持ちを表すことに重点が置かれている。ここでの傲慢さを表す“大爷（dàyé）”は“我”の同位語であり、相手よりも自分が立場的に優位、もしくは権力や力があるという意味を持っている。“大爷我”という表現は発話者自身の地位を高める自称であり、受話者を威圧する勢いを表現することによって、自らを標榜する働きがある。これによって、動作主“我”が強調され、強勢の語気を強く表せるようになり、「注安が俺様によって捕まえられた」という事象を背景にし、動作主である“我”が自分の行為を正当化し、自慢する感情が表されるようになるのである。

4.「難事実現」が表される受身文の適格性

杉村（1998：59）はやり遂げることが困難であることは自分が「意外に」あるいは「ようやく」やり遂げたという意味が含まれ、このような発話者の「自己称揚」の感情が表される受身文を「難事実現」の受身文と定義している。次の（11）がその該当例として挙げられている。

（11）a*饭被我煮好了[4]。

b 饭终于被我煮好了。

（11a）は马真（1997：164）において、非文として捉えられているものであるが、副詞の“终于”が用いられると、「難事実現」のニュアンスが表される（11b）になり、容認度が（11a）より大幅に上昇する。

なぜ“终于”などの副詞が用いられる受身表現では「難事実現」の意味が生じるのか、その成立を支える動機に関して、杉村（1998）及び杉村（2016）では、詳細な分析は行われていない。本稿では主観性という概念を用いて、この問題の解明を試みる。

沈家煊（2001:1）では、主観性（subjectivity）の定義を“语言的这样一种特性，即在说话中多多少少总是含有说话人‘自我’的表现成分，说话人在说出一段话的同时表明自己对这段话的立场、态度和感情，从而在话语中留下自我的印记。”［言語の一種の特性。即ち、発話者の発話の中には、多かれ少なかれ発話者の「自分」を表す成分が入っている。発話者は話す際、その発話に対する立場や態度、感情をも同時に表しており、それによって発話の中に自分のイメージを残す］と述べられている。つまり、言葉においては、述べられる出来事に対して発話者の信念や態度が確認できる文法的な表現が存在し、このような文法的な表現は文型に具体的影響を与えるものである。文型の意味を明らかにするためには、必ず言語行為に参与する発話者・受話者の意図や態度等の主観的要素をも考慮しなければならない。

刘正光（2011）は主観性マーカー（subjective mark）[5]が付加されることによって、不適格だとされる表現が自然に成立する場合があると述べている。（12）と（13）の例文で語気助詞と結果補語の主観性が文の容認度に及ぼす影響を見てみる。

（12）a??我看书。

b 我看书呢。（a、b ともに刘正光 2011）

［私は本を読んでいるんだよ。］

a は単なる「私は本を読む」という動作主の動作が表され、この動作の時間軸上の位置づけや発話者の意図が読み取れないため、単文だけでは容認度が低い。

これに対し、語気助詞“呢”が付加されている b は自然な文として成立する。“呢”があることによって、「本を読む」という動作の持続状態が明白となり、さらに、発話者の「事実を相手に確認する」というムードが表されているためである。

（13）a*我把饭做过。

b 我把饭做煳过。（a、b ともに沈家煊 2002）[6]

［私はごはんを焦げつかせたことがある。］

沈家煊（2002）によると、“把”構文は動作主から受動者への「主観的な処置」を表している。即ち、発話者の主観によって、動作主と受動者の関係が処置関係であると認定されることである。受動者の変化を表す結果補語が用いられるのがこれの証左である。このような文法的特徴を踏まえると、処置の結果が表されない（13a）は発話者の意図を伝達することができず、「ごはんをどうしたの」という受話者からの疑問が生じる可能性があるため、不成立だとされている。これに対し、結果補語“煳”が用いられた（13b）では、ごはんが焦げてしまい、食べられなくなるという変化が読み取れるようになり、過分義という発話者の主観的な判断が表現されることによって、（13a）のような違和感はなくなる。

上述の（12）と（13）はいずれも語気助詞や結果補語などの付属成分が付加された後、発話者の主観的評価が表されたことによって、不自然あるいは不成立とされる表現から適格な表現へとなる。以上のことから、主観性には表現の容認度を上昇させる働きがあると言える。

次に、杉村（1998）及び杉村（2016）で言及されている「難事実現」という概念と、“被我”が用いられる受身文の成立関係について、主観性という観点から改めて分析してみる。いわゆる「難事実現」は実際に発話者自身にとって目標の達成が難しいということである。他人から見るとそんなに難しくないことであっても、発話者が難しいと認識した場合、“被我”が用いられることもある。つまり、発話者の主観性が“被我”が用いられる受身文の成立を支える要素であると考えられる。この証拠として、ほとんどの「難事実現」の受身文では、発話者の主観的感情が観察されている。例えば、

（14）饭终于被我煮好了。（再掲（11b））

（15）多少年谁也找不到，可叫我找到了。（再掲（4））

（16）这些错误倾向都被我们克服了。（毛泽东《关于整风运动的指示》）

［これらの誤った傾向はすべて我々に克服された。］

（14）における副詞の“终于”は長い過程を経て、最後にある結果が出るという意味を表し、（『中国語用例辞典』p.459）一般的に願望が達成された場合に使

われることが多い。この表現は語彙的な意味の他に、「発話者にとって結果を出すことは難しく、時間がかかる」という意味をも含み、発話者の「時間の持続」に対する主観的な態度を表している。このため、副詞“终于”は主観性マーカーとして“被我”が用いられる受身文の適格性を高める働きをしていると言える。

“终于”と同様に、驚嘆や感動の気持ちを表す“可”と、発話者にとっての「すべて」や「まんべんなく」の意味を表す“都”が（15）と（16）の成立および発話者の難事実現してからの満足感の表出に役立っている。これに関連して数量表現が用いられる例を見てみる。

（17）敌人一个排被我们消灭了。（杉村 1992）

［敵の一連隊は我々によって殲滅させられた。］[7]

（17）は“一个”という数量表現が用いられた受身文である。数量表現の“一＋量詞”は計数機能を有する他に、発話者にとって基準を超えるという主観的な認識を表すこともある。例えば、

（18）a 这个村子里只有一口井。（自作）

［この村にはたった一つの井戸しかない。］

b 他能说一口流利的北京话。

［彼は純粋な北京語を流暢に話すことができる。］

（18a）における“一口”は客観的に井戸の数を表し、数量表現の基本機能である計数機能を果たしているのみに対し、（18b）の“一口”の方は言葉の発音やアクセントに全くなまりがないことが表されている。これは発話者の「程度が高い」という主観的な判断である。（17）における“一个”は（18b）のように、「まるごと」という主観大量の意味も含まれていると思われる。ここでの“一个排”は「まるまる一連隊」という意味を表していると認識する方がより適切であり、部隊の成員として一連隊を殲滅した（難しい状況を克服した）という発話者の主観的感情を読み取ることができる。このため、数量表現の“一个”は（17）の成立を支える主観性マーカーとして捉えられるものであると言える。

上述の分析から、文の成立は、統語論的な文法の制約及び発話者の発話意図と密接な関係があることが分かる。よって、もともと不成立だとされている表現は特定の発話環境における発話者の主観的な感情が付加されれば、成立する場合もあると言えるだろう。杉村（1992）は、“终于”や“都”などの付加成分のない“饭被我煮好了”のような通常であれば容認度が低いとされている表現でも、「炊き上げるのが難しい」と想定される特定の発話環境であれば自然な表現になると指摘している。このことはまさに人間の主観的な認識と文の成立が深く関わっている証左と言えよう。

５．反予期の情報

言語行為が行われる際、発話者は出来事に対する主観的把握（construal）を言語に持ち込む傾向がある。これによって、発話者の主観性が含意された構文形式が生まれる。この過程は言語の主観化と呼ばれている。この該当例として、反予期（counter-expectation）表現が挙げられる。発話者が伝達する情報のうち、自分自身あるいは受話者の予想と反する情報が反予期の情報である（吴福祥（2004:223））。

「自己称揚の受身文」も「自己批判の受身文」も、伝達する情報には、発話者或いは受話者の予期とは反する情報が含まれている。まず、発話者の予期に反する例を見てみる。

（19）第一天穿的袜子就被姐姐我穿破，强大啊！（(9) の再掲）

（19）は、発話者の靴下がすぐに破れるわけがないだろうという予想のもとで発話されたものである。自分のせいで初めてはく靴下に穴が開いたという事実は動作主である発話者にとって予想外のことであった。発話者はまさに自分に起こった全く思いがけない出来事に対し複雑な心境を表したのである。次の(20)も（19）と同様であり、発話者にとって予想外の出来事が表されているものである。

（20）这几天，赵勇感冒了，她每天拉他到医院去打针。可巧被我们碰上了。
（姜天民《第九个售货亭》）
［この数日間、趙勇は風邪を引いていた、彼女は毎日彼を連れて病院に注射を打ってもらいに行っていたところ、ちょうど我々と出くわした。］

発話者は「趙勇に出会うと思っていなかった」という前提条件の下で、（20）の文を発話したわけである。副詞“可巧”は「たまたまぴったり」や「偶然に一致する」という意味を表し、発話者の「ばったり」と「たまたま」という意外な気持ちが読み取れる。

（19）、（20）と異なり、次の（21）は受話者の予期に反する情報が表されている例である。

（21）他的花招被我识破了。（杉村 1992）
［彼のペテンは私に見破られた。］

発話者は「受話者は私が彼のペテンを見破れると思わない」と思いながら、(21)を発話したと想定できる。(21) から読み取れる「自己称揚」の主観的態度とは、受話者の考えや意見を否定する発話者の気持ちである。

これまでの考察から、“被我”が用いられる受身文とは、第一人称が動作主に

なることから、発話者の強い主観性（発話意図や態度）をはっきりと読み取ることができる構造であるといえる。次の節では、受身文に用いられる第一人称の語用的な特殊性を見てみる。

６．　第一人称の発話視点について

Finegan（1995:4）によると、主観化の影響は主に発話者の視点と感情、認識の三つの面に現れている。発話者の視点は出来事を記述する立場あるいは出発点を指し示す。これは出来事を記述する際に、どのような人称が選択されるのかという問題にも関わっている。

罗刚（1994:163）は出来事を述べる視点を次の三つに分けている。

（一）発話者が傍観者の立場から出来事を客観的に述べるという視点。

(22) 很久很久以前，有个很聪明的小和尚叫一休。

（《一休逸话（日本民间故事）》）

［むかしむかし、一休というとてもかしこい小僧がいた。］

（二）発話者がその登場人物の誰かになりきって、その人物の立場から記述するという視点。

(23) 老奶奶……忽然看见有一个东西从上游一起一浮地漂下来。

（《桃太郎（日本民间故事）》）

［おばあさんが……突然、ある物が上流からどんぶらこ、どんぶらこと流れてくるのを目にした。］

（三）発話者がその登場人物の誰かになりきって、その人物と自己を同一視化し、第一人称の立場で記述するという視点。

（24）你要是真想听我讲，你要想知道的第一件事可能是我在什么地方出生，我倒霉的童年时光怎样度过，我父母在生我之前干些什么……

（《麦田里的守望者》）

［もし君が、この話を本当に聞きたいんなら、君がまず知りたいことは、僕がどこで生まれたとか僕のチャチな幼年時代がどんな具合だったとか、僕が生まれる前に両親は何をやってたか…］

客観的に事実を報道することを目的とする新聞やニュースなどに用いられる（一）の場合と異なり、第一人称の視点で記述する（三）の場合は発話者が受話者と向かい合って話すような雰囲気が作られ、発話者の体験を比較的率直に表現することができ、通常自伝などの文体に用いられることが多い。このような差異が生じる理由として、（三）における第一人称の記述方法は発話者の主観

的感情や意図を容易に表すことができるということが考えられる。

次に、第一人称がコンテクストに与える影響を見てみる。

（25）尊敬的律师先生，我是怀着对法律的敬意和对您的职业和对您本人的敬意前来求教的。请不必暗示，我会按时付钱。（王其莉 2015）
［……暗示する必要はありません、私は（きっと）時間通りに料金を払いますから。］

（25）の助動詞“会”は本来「ある出来事が起こる可能性」（『中国語用例辞典』p.163）を表す。王其莉（2015）は当該事態が第一人称の動作である場合、“会”は可能性を表す他に、「意志」の意味も派生すると指摘している。このような派生義は第一人称の用いられる文脈が“会”に託した意味であり、“会”が本来持つ意味ではない。（25）からは第一人称の“我”が文成分である“会”に影響を与え、「意志」という意味を派生させていることがわかる。次に、第一人称が文の適格性に影響を与える例を見てみる。

（26）a 她非去不可，我们也劝不了。
b?她非去，我们也劝不了。
［彼女は（覚悟を決めて）行かなければならない、私たちも説得しきれない。］
c 我非报仇不可，不报仇我誓不为人。
d 我非报仇，不报仇我誓不为人。　（a、b、c、d ともに刘正光 2011）
［絶対復讐してやる、そうしなければ、私は人間ではない。］

（26）は“非 V 不可”が含まれる表現である。一般的に、“不可”は前の“非 V”との結合が非常に緊密であり、省略されると、文に不自然さが生じる。（26a）と（26b）の差異からこの点は明らかである。しかし、第一人称が主語となる場合、“不可”が省略された（26d）はそれが省略されない（26c）と同様、自然な文として成立する。

“非 V 不可”が用いられる表現では、第一人称が主語となる場合、“不可”を省略しても文が成立する。これについて王灿龙（2008）は発話者が動作主と同一の場合、自分の意志をはっきりと表すことができるため、意志性を際立たせるマーカーは必要ないと指摘している。“不可”は立場や主張が確固とする発話者の語気を表している。（26d）における“我非报仇”という表現は、すでに発話者の主観的な意志が明確に表されているため、「してはいけない」という強い意志を表す“不可”が省略されても文の容認度が下がることはない。

また、潘国英（2007）は動詞の重ね型が通常、条件なしで第一人称と共起することができる（例えば（25a））のに対し、第一人称以外の二人称や三人称との共起は一定の条件がないと実現できないと言及している。例えば、（27b）の

ように、動詞の重ね型が用いられる動目構造“溜溜鸟”は第三人称“他”の述語にはならないが、これにモーダルマーカーの“该”と使役を表す“叫”が用いられると、成立するようとなる（例（27c）と（27d））。

（27）a 我去公园溜溜鸟。

［私は（ちょっと）公園へ鳥の散歩をしにいく。］

b*他去公园溜溜鸟。

［「彼は（ちょっと）公園へ鳥の散歩をしにいく」の意味］

c 他该去公园溜溜鸟。

［彼は（ちょっと）公園へ鳥の散歩をしにいくべきだ。］

d 叫他去公园溜溜鸟。

［彼を（ちょっと）公園へ鳥の散歩をしにいかせる。］

（a、b、c、d ともに黄蓓・张建理 2015、日訳は筆者による）

動詞の重ね型は「ちょっとやってみる」や「気軽に」等の発話者にとって主観小量の意味を表すものである。これが用いられる（27b）では、発話者は動作主（“他”）と異なる主体であり、動作主の感情や意志をコントロールできないのは当然である。主観小量の発話者の態度は第三人称“他”と相容れないため、（27b）は不成立とされている。

ここで、“被我”が用いられた受身文における“我”の役割を再度検討してみる。

（28）这个秘密终于被我发现了。（杉村 1998）

［この秘密はついに私によって突き止められた。］

（28）’这个秘密终于被发现了。

“我”の努力によって秘密が隠されていた状態から発見された状態になることから、動作主の存在が動作の対象に変化を起こさせる働きをしていると言える。このことから、例（28）の意味的特徴は、動作主がすでに行われた出来事を背景にして、「自己称揚」の主観的感情を表すことであると言える。一方、第一人称の“我”が削除された（28）’は動作主目的語を失い、主語“这个秘密”についての題述文となるため、ここからは動作主の喜怒哀楽といった主観的感情は読み取れない。

発話者は自分の観点や意図を明確に伝達するために、できる限りの情報を駆使し、自分の態度を言語化しなければならない。グライスが提唱した四つの会話の協調原理（cooperative principle）によると、発話者は必要な情報を十分に提供し、情報の伝達に必要な要素は省略してはいけないとしている。“被我”が用いられた受身文では、第一人称“我”は受動者に影響を与える要因として動作の影響力を強化する働きを果たす他に、発話者の主観的な態度を表すことまで

きる。このことは協調原理における「量」の原則に合致し、文の成立のために不可欠な要素となっているのである。

7．おわりに

本稿では主観性という概念を援用し、中国語の受身文のうち、第一人称の動作主目的語を持つ受身文の成立の動機づけについて検討を試みた。

“被我”が用いられた受身文は発話者の「自己称揚」と「自己批判」の主観的感情を表している。その下位表現として、「威張る」、「自分の行為を正当化する」及び「なすすべがない」、「自嘲する」といった感情が表されているケースも観察された。杉村（1998）は“被我”が用いられた受身文はもともと不適格だとされるが、“终于”や“竟然”などの付属成分が用いられると、「難事実現」の意味が読み取れるようになり、成立すると指摘している。本稿では杉村(1998)の考察に基づき、“被我”が用いられた受身文の成立は第一人称の“我”の主観性に関わっているのではないかと推測し、第一人称である“我”が文脈における文成分に意味機能の変化をもたらし、不自然とされる表現の容認度を高めるという機能を証拠に、論証を試みた。

プロトタイプの受身表現は不如意や望ましくない出来事を表す一方、“被我”が用いられた受身文は発話者がコントロールできない、あるいは予想していなかった出来事を表すことが主な目的である。これらの出来事からは発話者の「驚嘆」や「自嘲」などの周辺的意味も生まれている。このことからも“被我”が用いられた受身文はプロトタイプの受身表現とは異なり、非典型的な受身形式であると言えるのではなかろうか。

注

1　本稿では一部不自然な日本語訳が見られるが、原文の意味を忠実するために、“被我”は「私によって」あるいは「私に」と訳した。

2　ここでの“哥哥我”は例（10）の“大爷我”と同様のパターンである。このような表現における“哥哥”や“大爷”は相手に対する敬称ではなく、“我”と一緒に用いることで自分の存在を過大に表現する役割を持っている。後続内容で“大爷我”の意味を参照。

3　中国語の受身表現の感情的色合いについては、王力（1985）、王还（1983）、

马真（1997）、李临定（1980）等を参照。

4 本稿では、“饭被我煮好了”という文は非文とは判断せず、条件付きで成立すると主張する。その条件については後ろに続く本文で言及する。

5 管見の限り、先行研究では、主観性マーカー（subjective mark）の定義および範疇に関して、まだ統一的な説は確立していない。現代中国語において、発話者の主観的感情は、言語化される際、副詞や語気助詞、アスペクトマーカーなどによって表される。これらの付属成分は、一般的に主観性マーカーであると認められている。

6 原文の内容に一部変更を加えた。

7 邦訳は杉村（1992）のものをそのまま使用。

参考文献

中国語

黄蓓・张建理〈论主观性的语境使成条件及集群效应〉《语言教学与研究》第 3 期、九十五～一百零三页、2015 年。

李劲荣〈汉语被动句的典型形式及其理论意义〉《东方语言学》第 7 期、七十～八十二页、2010 年。

李临定〈“被”字句〉《中国语文》第 6 期、四百零一～四百一十二页、 1980 年。

刘月华・潘文娱・故韡《实用现代汉语语法(增订本) 》、商务印书馆、2001 年。

刘正光〈主观化对句法限制的消解〉《外语教学与研究》第 3 期、三百三十五～三百四十九页、2011 年。

罗刚 《叙事学导论》、云南人民出版社、1994 年。

马真 《简明实用汉语语法教程》、北京大学出版社(1981)、1997 年。

潘国英〈论汉语动词重叠的主观性表达〉《修辞学习》第 1 期、三十四～五十七页、2007 年。

杉村博文〈论现代汉语表“难事实现”的被动句〉《世界汉语教学》第 4 期、五十七～六十四页、1998 年。

杉村博文〈汉语第一人称施事被动句的类型学意义〉《世界汉语教学》第 1 期、三～十五页、2016 年。

沈家煊〈语言的“主观性”和“主观化”〉《外语教学与研究》第 4 期、二百六十八～二百七十五页、2001 年。

沈家煊〈如何处置“处置式”〉《中国语文》第 5 期、三百八十七～三百九十页、2002 年。

王灿龙〈“非 VP 不可”句式中“不可”的隐现〉《中国语文》第 2 期、一百零九～一百一十九页、2008 年。
王还〈英语和汉语的被动句〉《中国语文》第 6 期、四百零九～四百一十八页、1983 年。
王力 《中国现代语法》、商务印书馆(1943)、1985 年。
吴福祥〈试说“X 不比 Y・Z”的语用功能〉《中国语文》第 3 期、二百二十二～二百三十一页、2004 年。

日本語

木村英樹 「こと・こころ・ことば―現実をことばにする「視点」」唐沢かおり・林徹 編『人文知（01)』、九十七～百十七頁、東京大学出版会、2014 年。
久野暲 『談話の文法』、大修館書店、1978 年。
王其莉 「中国語の“会”に関する一考察」『日中言語対照研究論集』第 17 号、百三十五～百五十三頁、2015 年。
杉村博文 「遭遇と達成」 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』二百七十七～二百九十四頁、くろしお出版、1992 年。

英語

Finegan，Edward .Subjectivity and subjectivisation: an introduction. In D. Stein and S. Wright .*Subjectivity and subjectivisation,* Cambridge University Press.1-15. 1995.
Kuno, Susumu 1987 *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. The University of Chicago Press.

引用した例文のコーパスサイト

BCC：北京语言大学 BCC 现代汉语语料库 http://bcc.blcu.edu.cn/